

井出恒雄著 『中世の文芸・非文芸』

板坂, 耀子
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/12158>

出版情報：語文研究. 36, pp.56-58, 1974-02-28. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

紹介

井手恒雄著「中世の文芸・非文芸」

板 坂 耀 子

この本は十四の論文からなっている。一九六〇〜一九七〇年にかけて、種々の雑誌・書籍に発表されたもので、とり上げられた題材も式子内親王・西行・慈円らの和歌、方丈記、徒然草、平家物語、芭蕉の句、五山文学、川柳など、まことに多彩である。引用される書物にいたっては、藤村「若菜集」、佐多稲子の作品、宮本百合子の芸術論、更にはマルクス・エンゲルスの著述まで、まさに、枚挙にいとまがない。

しかし、これら多くの材料を使用して、著者が述べようとしたことは、「あとがき」で著者自身が記されるように、「一貫して、中世において何が文芸であり、何がそうでないか」ということであった。

巻頭論文「中世の文芸・非文芸」は、そのまま、この書全体の題名となっている。と同時に、内容的にも、これは、全体を通じて一貫している、著者の主張でもある。

著者の姿勢は、全論文を通じて、きわめて明確であるが、とりわけ、この巻頭論文においては、鮮明であり、これを巻頭にあげたのは大胆であるとさえ言えよう。この巻頭論文「中世の

文芸・非文芸」で、著者は、最近とみに話題となっている「何を文芸作品と見、何をそうでないとするか」の問題について、「それは困難な問題である」とされながら、まっ向から、この課題にたちむかい、はっきりとした見解をうち出された。

それは、一言で言うなら「文芸を否定するような姿勢や内容の作品は文芸とはいえない」という点に帰するであろう。そして、このような観点にたつて、著者は、最近、文芸作品としてとり上げらるべきであると主張されることの多い「正法眼蔵」「正法眼蔵随聞記」の類は、文芸作品としてとり上げるべきではない、それどころか、それらを文芸と認めることには、実はある種の危険が伴うのではないかと述べられるのである。なぜならば中世の社会では、和歌・連歌等の典型的な文芸作品は、それらを「いたづらごと」として排斥せんとした封建仏教イデオロギーの下で、ようやく細々と生きのびたのであり、「正法眼蔵」「正法眼蔵随聞記」等は、他ならぬその仏教のイデオロギーを徹底して肯定するものではないのか、と。そして、仏教が日本文芸史上に貢献し、すぐれた作品を生む力となったとい

う説にも、強い疑問を投げかけられて、仏教は、むしろ日本文芸史において、ブレイキとして作用したのだと主張される。

仏教の役割をこのように否定的にとらえるのは、著者が早くから唱えられていた説である。それだけに反論も多く、様々な議論を呼んだ。とりわけ、「何をもって文芸とするか」の問題が、重要視されはじめている。昨今、それに対する一つの答として、著者従来の仏教に関する見解とが結合して示されたこの論文はその後、「あとがき」で著者が述べられるように、一九六九年「中世文学会の公開討論「中世法語の文学性とは何か」」にまでつながっていった。その討論の緊張と興奮がまださめやらぬ中で、著者は、この書に収録された二番目の論文「法語文芸・非文芸」を書かれたとある。著者はここで、更に具体的な例をあげられて、中世における仏教が具現していたところの非人間的なストイシズム、男女の恋をしりぞけ、花月を賞することを拒み、現世の楽しみを求めないことを否定した仏教の思想を紹介され、このように、いわゆる文芸と、明らかに対決する主義を表現している書物が、どうして文芸であり得ようかと、問いかけられる。

文芸・非文芸の境界線を、どこに、いかようにひくべきかに関しては、勿論種々の論がある。著者のこのような定義にも異論を持たれる方は、もとよりおられるであろう。だが、それはさておくとしても、著者がいわれる「文芸を否定する」「文芸と対決する」とは一体どういうことであるか、今少し詳細にみたい。

この定義を安易に理解し応用されることを、著者も恐れておられるようだ。既述した二論においても著者は、一見、文芸を否定し、花月の情や男女の愛をしりぞけようとしているかに見える作品の中に、実はそういう姿勢を表面で取ることによつて、かろうじて自らの人間的な欲望を表現することに成功している

ものがあることを指摘され、これらは勿論文芸といえる、それもすぐれた文芸であるといえる、とされた。真の意味での文芸否定であるかどうかを、一々の作品について、読みとつていく必要があるというわけである。

この指摘は、著者の「非文芸」の定義を完全にしておくものであると同時に、「文芸」の定義においても重要な柱となるものである。すなわち著者は、このように、何らかの制約のもとで、正々堂々と語れぬことを、何とか工夫をこらして表現し、めざす相手に伝達するというこそ、文芸の本質であるとされるからである。この、工夫をこらして表現することを、著者は「言語のクンスト（技術・芸術）」だと呼ばれる。

以上のような視点にたつて、一つ一つの作品を注意深く見つけていかれた結果が、以下の一つ一つの論文であると言つてもいいであろう。

中世文芸の上に常に重くのしかかった仏教の禁欲主義と、それに対する抵抗としての文芸——著者は、それをくり返し我々に説くのみならず、そのように見た時、我々が既に知りぬいていると思つた作品の一つ一つに、思いもかけぬ新しい解釈が可能になることを実証してみせてくれる。式子内親王「花にも思ふ」の歌が、「更級日記」と同様に、風流にあげられた過去をばじらう述懐（それもまた前述のクンストではあるが）であること、長明の和歌の中に、川柳のそれとも相通する大胆な仏教冒瀆の精神がひそんでいること、「平家物語」冒頭の有名な一文は単なる「諸行無常」ではなく、ひそかに激しい清盛（「文記」）批判をこめているということ、更に、「徒然草」「方丈記」、西行の歌等に見る、「人間らしさ」の主張、また、「徒然草」の「つれづれ」は本来、深刻な意味など持たず、ただ、「手もちぶさた」「退屈」という程度の意味にすぎぬこと——

細かい検討と独特の見解に基いて説きあかしてゆく著者の語り口は、読む者をひきつけて、はなさないであらう。

我々は国文学者として、いかにあるべきか、どのような心をもつて古典と接してゆけばいいか、について語る「ある高僧の逸話」をもつて、この書はしめくくられている。この一文などは、あるいは不要という人がいるかもしれない。いや、これに限らず、著者が各論文の中で、ともすれば述べられる、文献学者への批判をはじめとする、種々の明瞭な見解についても、言わずにおいた方が無難だったのではないかと思われる方が必ずいよう。しかし、著者としては、まさに、他の何よりも、それらの見解をこそ、述べられたかったのであらうと思う。また、この書の何よりの魅力も、おそらくは、そこにある。著者の全人格と思想とが、生のまま提示され、著者自身の論と入りまじって一体となつて、我々に問いかけ、迫つて来るのである。

(昭和四十八年 桜楓社刊
二二二八頁 三八〇〇円)

◇ 学 会 集 報

▼講義題目 昭和48年度第一学期

(大学院)	国語学特研	国語学史(阿刈霞)	春日	教授
(大学院)	全 演習	国語資料の研究	春日	教授
(大学院)	全 特講	日本文法の諸問題	春日	教授
(学部)	全 演習	万葉集 巻七	春日	教授
(大学院)	全 特研	音韻論	奥村助教	教授
(大学院)	全 演習	国語学の諸問題	奥村助教	教授
(学部)	全 特講	九州諸方言の系譜	奥村助教	教授
(学部)	全 演習	近世語 天の網島	奥村助教	教授
(大学院)	全 演習	平安朝文学研究法	今井	教授
(大学院)	全 演習	雲州消息(明衡往来)	今井	教授
(学部)	全 特講	平安女流文学の基盤	今井	教授
(学部)	全 演習	詞花懸露集	今井	教授
(大学院)	全 特研	近世文人伝記研究	中野助教	教授
(学部)	全 演習	貞門俳諧	中野助教	教授
(学部)	全 特講	近世文学の背景	中野助教	教授
(学部)	全 演習	戯作(滑稽本類)	中野助教	教授
(大学院)	全 特研	近代詩研究	重松	教授
(大学院)	全 演習	近代小説作品研究	重松	教授
(学部)	全 講義	昭和文学史の諸問題	重松	教授
(学部)	全 臨講	韻学史と国語史	重松	教授

東京大学
教育学部
馬淵助教

九条大学
教養部
重松教授